

目的 嗜好とは、主体と客体との間に成立する一つの行動であるがゆえに、人の嗜好を決定する要因には、いろいろな角度からの展開がなされてゐる。筆者は、当該人の属する集団の社会的環境、とりわけ母親の幼児の食生活にたいする知識、及び関心の度数が、食物の好き、嫌いという嗜好にどのような影響を与えてゐるのであろうか。またその特性とよいかなるものであるのか、を因子分析、及び構内判別グラフによる一つの解析を試みたので報告する。

方法 調査対象：兵庫県豊岡市における2保育園において191名の園児（男児93名・女児98名、1才から5才）を対象とした。同じく園児の母親191名（20才から50才）を対象とした調査内容：園児とその母親が、おもにどちらを好むかという嗜好調査、及び日常よくつかわれ代表的な食品をとりあげ5段階評定法による嗜好調査、さらに母親の栄養にたいする関心度をほかす調査。分析方法：因子分析、構内判別グラフによる。

結果 貢献度62%と有意である。因子分析、及び構内判別分析よりF1因子は、家族の健康意識、F2因子は、食品公衆意識とみらる。全体に好きというグループは、家族みんなの健康にたいする意識があり、嫌いというグループは、食品公衆にたいする意識が強い傾向にある。嗜好は食欲とともに食生活を左右する重要な因子で、その働きのかんは、身体面での健康に影響をおよぼし特に、発育期にある幼児の肉體面、精神面での影響は大きい。これらの意識調査が、栄養指導を行なうにあたって實際面での参考にはれは、たいせいである。